

「仏との出会い、自分との出会い」

大谷大学 一楽 真

はじめに

相模原事件(2016)に見る人間の問題

- ・神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で発生、19人が死亡。
- ・熊谷晋一郎（小児科医、東京大学先端科学技術研究センター准教授）
「用無しの不安」

1 「王舎城の悲劇」

「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。然れば則ち、浄邦縁熟して、調達、闇世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。斯れ乃ち権化の仁、齊しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆・謗・闡提を恵まんと欲す。」（『教行信証』総序 聖典 149 頁）
→浄土が明らかになる機縁（広開浄土門）

2 『涅槃経』に見る阿闍世の救い

- ・阿闍世の苦悩

「その時に、王舎大城に阿闍世王あり。その性弊悪にしてよく殺戮を行ず。口の四悪、貪・恚・愚痴を具して、その心熾盛なり。乃至 しかるに眷属のために現世の五欲の楽に貪着するが故に、父の王辜(ツ)なきに横に逆害を加す。父を害するに因って、己が心に悔熱を生ず。乃至 心悔熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡臭穢にして附近すべからず。すなわち自ら念言すらく、「我今この身にすでに華報を受けたり、地獄の果報、將に近づきて遠からずとす。」（『教行信証』信巻所引『涅槃経』の文 聖典 252 頁）

- ・事件の背景

「善男子、羅闍祇の王頻婆沙羅、その王の太子、名づけて「善見」と曰う。業因縁の故に悪逆の心を生じて、その父を害せんとするに便りを得ず。その時に悪人提婆達多、また過去の業因縁に因るが故に、また我が所において不善の心を生じて、我を害せんとす。」（同上 聖典 268 頁）

- ・耆婆との出会い

「その時に大医、名づけて耆婆と曰う。王の所に往至して、白して言さく、「大王、安くんぞ眠ることを得んや、不や」と。（中略）耆婆、答えて言わく、「善いかな、善いかな、王、罪を作すといえども、心に重悔を生じて慙愧を懐けり。大王、諸仏世尊常にこの言を説きたまわく、「二つの白法あり、よく衆生を救く。一つには慙、二つには愧なり。慙は自ら罪を作らず、愧は他を教えて作さしめず。慙は内に自ら羞恥す、愧は発露して人に向かう。慙は人に羞ず、愧は天に羞ず。これを慙愧と名づく。無慙愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす。慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慙愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く。善いかな大王、具に慙愧あり」と。（同上 聖典 257 頁）

・阿闍世とは誰か

「阿闍世は普くおよび一切、五逆を造る者なり。」「阿闍世は、即ちこれ煩惱等を具足せる者なり。」「阿闍世は、即ちこれ一切、未だ阿耨多羅三藐三菩提心を発せざる者なり。」(同上 聖典 259 頁)

・釈尊の説法

「王もし罪を得ば、諸仏世尊もまた罪を得たまうべし。何を以ての故に。汝が父、先王頻婆沙羅、常に諸仏においてもろもろの善根を種えたりき。この故に今日王位に居することを得たり。諸仏もしその供養を受けたまわざらましかば、則ち王たらざらまし。もし王たらざらましかば、汝すなわち国のために害を生ずることを得ざらまし、と。もし汝父を殺して当に罪あるべくは、我等諸仏また罪ましますべし。もし諸仏世尊、罪を得たまうことなくは、汝独り云何ぞ罪を得んや。」(中略)

「頻婆沙羅、現世の中において、また善果および悪果を得たり。この故に先王また不定なり。不定を以ての故に、殺もまた不定なり。殺もまた不定ならば、云何してか定んで地獄に入ると言わんと。」(同上 聖典 262 頁)

・阿闍世の転換

「世尊、我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より梅檀樹を生ずるをば見ず。我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子は、我が身これなり。梅檀樹は、すなわちこれ我が心、無根の信なり。無根は、我初めて如来を恭敬せんことを知らず、法・僧を信ぜず、これを「無根」と名づく。」「世尊、もし我審かによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もって苦とせず。」(同上 聖典 265 頁)

「我いま仏を見たてまつることを得たり。得るところの三業の善、

願わくはこの功德をもって、無上道に回向せん。

我いま供養するところの仏・法および衆僧、

願わくはこの功德をもって、三宝常に世にましますん。

我いま当に獲べきところの種種のもろもろの功德、

願わくはこれをもって、衆生の四種の魔を破壊せん。

我悪知識に遇うて、三世の罪を造作せり。

今、仏前にして悔ゆ、願わくは後にまた造ることなからん。

願わくはもろもろの衆生、等しく悉く菩提心を発せしむ。」(同上 聖典 267 頁)

3 親鸞の受けとめ

- ・「ここを以て、今大聖の真説に拠るに、難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまう。喩えば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し。濁世の庶類・穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと。知るべし。」(同上 聖典 271 頁)

おわりに